

大学生活で少なからぬ位置を占めるのがゼミ。教員からすれば、ゼミの良し悪しは、教員の主効果より本人の主効果のほうが大きいような気がします。学生にとってはどのゼミに入れるかは一大事だったりしますよね。なのでゼミ志望調査票に「あなたの人となりについて」なんて欄があると、まあ大変なことになると思います。「私は負けず嫌いです。人と協調して物事を進めることができます」。バーナム効果か。しかし「コミュニケーション力」が強調される時代では、盛るテクニックが大事になるのも仕方ないことです。

そういうわけで *Neolamprologus multifasciatus* という小魚。タンガニーカ湖のシクリッドの一種で、Wikipediaによると、マルチーズという愛称で観賞魚としてまあ人気があるようです。野生ではオス数匹、メス数匹の群れで縄張りを持って暮らしている。オスが巻貝^注の貝殻を砂から掘り出して巣を作るんですが、分かりやすい話で、貝殻の数が多いうオスのほうがモテる。メスにとっては、隠れ家や産卵場所に使える貝殻は多いほうが良いと、恐らくそんな理由なのでしょう。

ところがどうもマルチーズ君たち、日本的謙譲の美德を持っているようで、掘り出す貝殻の数を控えめにしているみたいなのです。そこいら中にたくさん貝殻は埋もれているのに、むやみやたらと数を増やさない。このグローバルなご時世、そんな弱気なことではどうする。もっと自己アピールしなさい！ というわけでもないと思いますが、ドイツはマックスプランク研究所のジョーダンさんたち研究グループ、巣に貝殻を追加してあげるといってお節介を焼いてみることにしました (Jordan et al., 2016)。

はたして結果は残念なことに。貝殻が追加された巣には大きい魚がやってきて、自分らの産卵場所にするために、小さなマルチーズたちを蹴散らしてしまったのです。のび太のくせに生意気だっただけでいいでしょうかね。ジョーダンさん

たち、お節介の効果でオスがモテ始めるかをじっくり観察するつもりだったのに台無しだと、ボヤキ気味です。まあボンベしょって水中で実験した研究者もアテが外れて気の毒と言えそうですが、望みもしない僥倖を押し付けられたマルチーズたちも、たいがい気の毒ですよ。

これが他の魚だったら、身に余る幸運を授かったら遠慮したりするそうなのです。例えば掘った穴の大きさでオスがメスに求愛する魚（これもタンガニーカ湖のシクリッド）では、人間が穴を大きくしてやると、わざわざ元のサイズに戻すらしい (Schadelin & Taborsky, 2005)。「のび太のくせに理論」は動物の世界でもまあ一般的で、あんまり出すぎた真似をすると、他のオスに穴を壊されたり攻撃されたりするそうです。ニワシドリなんかも、人間が追加してやった求愛用の飾りをせっせと取り除くそうで (Madden, 2002)。でも悲しいかなマルチーズ君たち、多すぎる貝殻をどかしたくても動かさない（貝殻のほうが魚より大きいのです）。身に余る貝殻にただただ翻弄され、蹴散らされ、または自ら巣を放棄する小魚たち。今年もっとも泣ける論文の筆頭候補と言えるでしょう。

ということで、ご質問への回答ははっきりしてありますね。全力で隠す。これしかありません。

注

この巻貝の話がまたすごくて、なんでも持ち主の死後も分解されない貝殻が、数千年（数万年？）にわたって積もりに積もって、何メートルもの厚さになっているそう。タンガニーカ湖すごい。



Profile — 平石 界

東京大学大学院総合文化研究科博士課程退学。東京大学、京都大学、安田女子大学を経て、2015年4月より現職。博士（学術）。専門は進化心理学。